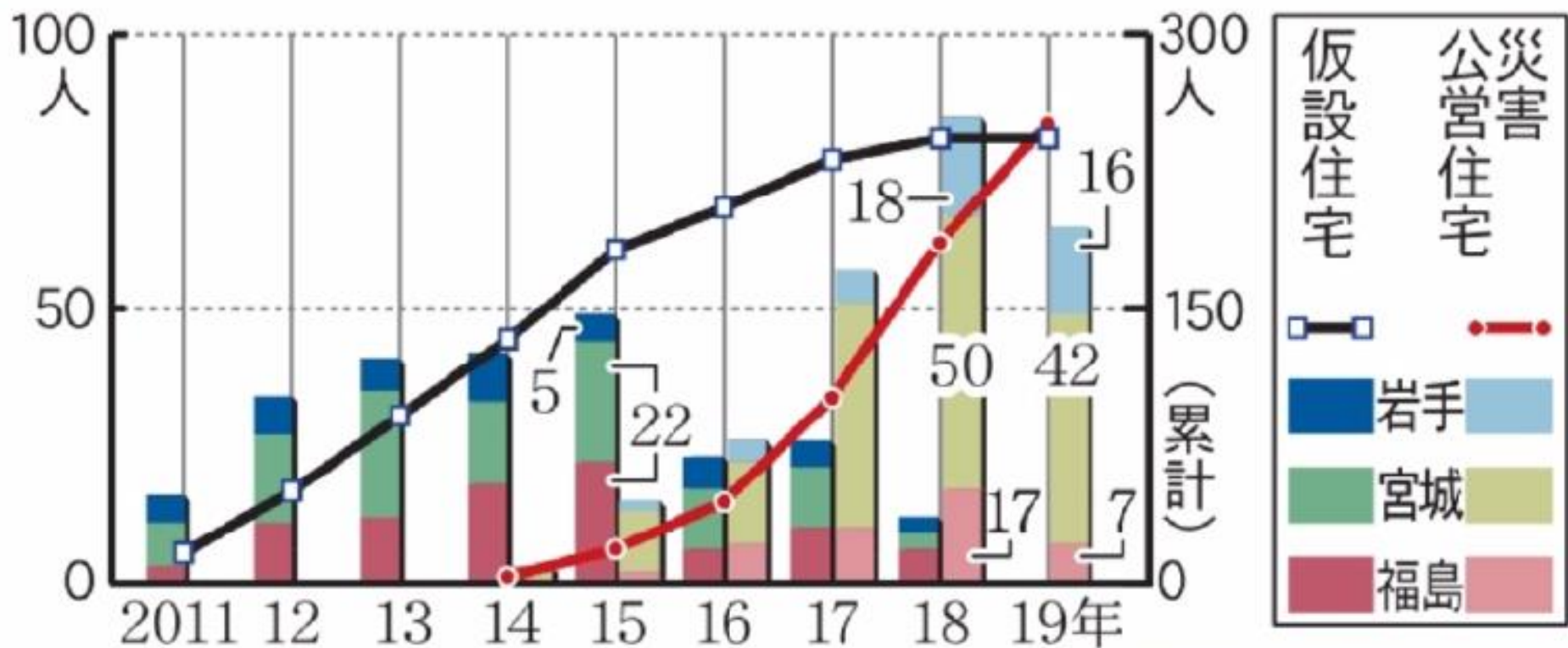


# 「男性の視点から見た災害にレジリエントなコミュニティの形成」



福島大学 うつくしまふくしま未来支援センター  
天野 和彦

# 被災3県の孤独死の推移



災害公営住宅の孤独死は宮城が計162人で最も多く、岩手計46人、福島計43人。65歳以上の高齢者は193人で全体の76.9%を占めた。

性別は岩手、宮城の2県で男性148人、女性60人で**男性が2.5倍**に上った。福島県警は死者の性別を明らかにしていない。

# なぜ男性に孤独死が多いのか

「孤独死」の定義

「誰にも看取られることなく亡くなったあとに発見される死」  
内閣府「高齢者の健康に関する意識調査」(2012)

「孤独死ゼロ作戦」！を展開している  
千葉県松戸市常盤平団地・中沢卓実自治会長  
「(男性は)身内との関わりがおおざっぱ。"会社は縦社会、地域は横社会化"という理解が乏しい。配偶者を亡くしたあとの立ち直りが遅い。身の回りのこと、特に料理ができない人が多い」 2020年5月談

# なぜ男性に孤独死が多いのか

阪神・淡路大震災の「孤独死」について

- ①アルコール摂取に起因する疾病が死因の多くを占めること
  - ②40～50代の中高年層がその中心であること
  - ③仮設住宅の居住環境やそこへの移転の影響がうかがえること
- という特徴があるとされた。

(田中, 「応急仮設住宅における「孤独死」の発生実態とその背景」 追手門学院大学 2017)

兵庫県の仮設住宅3万4600戸で約6万2000人の被災者が居住しており、このうち150件の孤独死が発生した。60代の男性の死亡の割合が圧倒的に多いのも特徴であった(神戸新聞 1997・5・2)

仮設住宅における孤独死の問題は、日本社会の経済的「豊かさ」の中で、社会的な弱者が構造的に発生し、そして構造的に排除されている現実が露呈した。

## そうした社会のゆがみの中に男性もいる

**新たな人間関係を築けず、震災後に孤立する中高年男性**

住宅政策のゴールとされてきた復興住宅（災害公営住宅）での孤独死が増加してきた。要因のひとつが復興住宅の状態。

仮設住宅の段階では阪神淡路大震災のときの教訓を生かし、そこで暮らす人たちの「つながる場」が作られていた。※ビッグパレットふくしま避難所ではサロンや足湯がつくられて交流の場になっていった。

ところが、復興公営住宅のつくりはその多くが、外界とつながりが鉄のドア一枚だ。廊下に出ても誰も歩いていない。

**復興公営住宅から寄せられた相談  
…男性が集会所に来ない**

# おでんプロジェクトという取り組み

復興公営住宅における、**交流と自治**に支えられた**住民参画事業**の展開へ

**なぜ、おでんプロジェクトなのか！**

**震災関連死は、人権の問題**

**孤立死・孤独死をなくしていく**

そのためには？

**男性も集える居場所（交流の場）が大事**

**ため息を、一人でつかさせない！**

# おでんプロジェクトという取り組み

復興公営住宅における、**交流と自治**に支えられた**住民参画事業**の展開へ

**なぜ、おでんプロジェクトなのか！**

誰もが知っているおでん。屋台も作っていく。地元の素材を活かしたおでんだねも作っていく。住民が居場所を創りだしていく！



NPO法人みんぶく（いわきチーム）の取り組み



# おでんプロジェクトという取り組み

復興公営住宅における、**交流と自治**に支えられた**住民参画事業**の展開へ

## おでんプロジェクトから交流の場へ



# 復興とは何か

# 権利としての生活再建（復興）

被災地でもいわれる自己責任論

個人に返されるべき問題ではないのではないか

しかし、社会全体の枠組み（政策と意識）が個人の課題として捉えているため、そうしたことが個人の判断決定に大きく作用している

**仮設住宅や地域において、要配慮者の孤立を防ぐための支援が重要**

→ 孤立を防ぐための仕組みを創り出す支援が重要なのではないか

社会的弱者を救っていく地域システムの必要性

- ・ 災害法制から福祉法制や医療法制へのシームレスな移行
- ・ 被災者の自治によるつながりがいのちを救う

# 復興とはなにか

- ①被災で奪われ失ったものを取り戻し回復すること
- ②震災で問いかけられた問題点を改善し克服すること
- ③復興のなかで生まれた新たな芽を発展させ定着すること（社会変革）